『官話急就篇』の訳者について
―打田重治郎の経歴―

The Translator of “Kanwa-kyūshū-hen”: Uchida Shigejirō's Career

常　　衛　邦
CHANG, Weibang

岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要
第54号　2022年12月　抜刷
Journal of Humanities and Social Sciences
Okayama University Vol.54 2022

『官話急就篇』の訳者について
―打田重治郎の経歴―

常　　衛　邦*

1.　はじめに

明治・大正期の中国語教科書である『官話急就篇』の訳本は、日本語研究の資料として考察することができると考えられる。これを対象とした先行研究として、質問表現を調査した園田（2017）、人称代名詞を調査した園田（2020）などが見られる。筆者もこれまでに『官話急就篇』訳本における可能表現文について考察し、五種類の可能表現形式の使い分けを分析したことがある（常（2021）、常（2021a））。

『官話急就篇』の訳本における日本語表現は方言の影響を受ける可能性があるため、各訳者の経歴、とくに出身地を明らかにすることが必要であると考えられる。

本稿は、打田重治郎の経歴について考察するが、その前に、まず『官話急就篇』及びその訳本について説明する。『官話急就篇』（明治37年）は宮島大八による初級の中国語教科書である。この教科書は中国語だけが使用されている。『官話急就篇』に対する日本語訳本には、『官話急就篇總譯』（大正5年）、『官話急就篇詳譯』（大正6年）、『急就篇を基礎とせる支那語獨習』（大正13年）の三点がある。

これまで、『官話急就篇總譯』（以下、「杉本訳」と呼ぶ）の訳者である杉本吉五郎、『官話急就篇詳譯』（以下、「大橋訳」と呼ぶ）の訳者である大橋末彦については、人名辞典などの資料を利用し、出身地、経歴を確認することができる（常（2021）、常（2021a））。しかしながら、『急就篇を基礎とせる支那語獨習』（以下、「打田訳」と呼ぶ）の訳者である打田重治郎の経歴（とくに出身地）については、筆者が調べたかぎり、先行研究や人名辞典には記述されていないようである。打田訳の序文などによると、打田重治郎は陸軍通訳の経験があること、「南満州」に滞在したことがあることが分かることから（これについては第2節において詳述する）、『日本陸海軍人名辞典』、『日本人物情報大系　満州篇』、『人名辞典「満州」に渡った一万人』、データベースについては、国立公文書館デジタルアーカイブ、JapanKnowledgeなどを利用して調査したが、有益な情報は得られなかった。

そこで、本稿は、打田訳及び打田訳以外の著書の序文などから、打田重治郎の経歴について明らかにすることを目指し（第3節）、そのうえで打田訳『官話急就篇』に現われた方言の影響について

*　岡山大学大学院博士後期課程（2022年9月修了生）

も考察する。方言の影響に関しては、筆者がこれまでに調査した打田訳の可能表現において、「～エル」に助動詞（ラ）レルが付く二重可能形式の「動詞連用形＋エラレル」という常用的でない形式が存在する。この可能表現形式は方言の影響を受けた可能性があると考えられる。よって、第4節では、打田訳の「動詞連用形＋エラレル」と杉本訳・大橋訳の使用状況との相違点を説明し、方言の影響について考察してみる。

なお、筆者が利用した打田訳は六角（1992）に収録されている影印本である。この影印本は初版で、大正13年12月25日、大連大阪屋號書店の発行である。

2.　打田重治郎について訳本から分かったこと

六角（1992）には、打田重治郎に関する記述があり、これは打田訳の自序などに基づく。以下、六角（1992）の記述を引用する（番号、下線は筆者による）。

> ①本書の扉には著者の肩書きが、「前陸軍通訳官　現済南居留民会書記長」と記されている。②自序によると、明治39年4月官命により「南満州」にいき、ひたすら中国語研究に没頭し、大正9年9月山東に転任した、とのべている。日露戦争後に陸軍通訳として中国東北に赴任し、爾来中国語を勉強してきていたのであろう。③緒言の末尾には近著として、『官話指南を楷梯とする支那語研究』・『華語便覧』・『華語跬歩を参考とする支那語鑽』の自著をあげている。だがこれらは未見である。

この記述から、打田重治郎について、以下のことが分かる。

①から、打田訳が出版されたとき、打田重治郎は「済南居留民書記長」を務めていること、陸軍通訳官を経験したことが分かる。②から、明治39年（1906年）から中国に行き、大正9年（1920年）山東に転任したと見られる。③から、当時、打田重治郎は他の著書の刊行も予定していたことが分かる。

以下、打田訳の自序を示し、六角（1992）の記述を確認する（番号、下線、句読点は筆者による）。

> ④明治三十九年四月余は官命を帯ひて、再ひ南満洲に赴くや、只管支那語の研究に没頭し、爾来、大正九年九月に至り、任に山東に転するに及ひ、益々、其研究の度を進めたり。此間、書に就き人に質し、此に索め、彼に問ひ、随て得れば随て録し、蒐め得たる資料実に尠しとせす。されと、是は一面より見て、散漫たる一堆の反古紙たるを思ひ、他面には支那研究の途にある豚児が資料にもと、其中より摘み録して物せるもの、即本書なり…後略…
>
> 大正十年八月中澣

支那山東省青島に於いて
著者識す

自序の④が六角（1992）の②と対応している。しかし、六角（1992）において、③の記述のように、打田重治郎は「緒言の末尾」に近著を挙げていると述べるが、確認したところ、それは「緒言」ではなく、「例言」の最後にあった。その部分を引用する。

一、本書に據り一と通り支那語の基礎を得たる篤學家は進んで更に予が近著官話指南を楷梯とする支那語研究及び華語便覧並に華語跬歩を參考とする支那語研鑽を熟讀せられんことを乞ふ

六角（1992）では、「『華語跬歩を参考とする支那語鑽』」と記述されているが、打田訳を確認したところ、『華語跬歩を參考とする支那語研鑽』となっている。六角（1992）の記述はおそらく誤植であると考えられる。

『官話指南を楷梯とする支那語研究』、『華語便覧』、『華語跬歩を参考とする支那語研鑽』について、図書の情報を検索できるデータベースであるCiNii、国立国会図書館サーチで調べたところ、「打田重治郎」でヒットする資料は、打田訳以外、『山東みやげ』（日華同文研究會、1929年）という文献のみであった（最終閲覧日、2022年6月15日）。引用した六角（1992）の記述の③も「これらは未見である」と述べている。よって、これらの文献は、結局出版されなかったか、中国で出版されていたとすれば、中国のどこかの図書館に所蔵されている可能性が考えられる。今後、調査する予定である。

3. 打田重治郎、訳本以外の著書

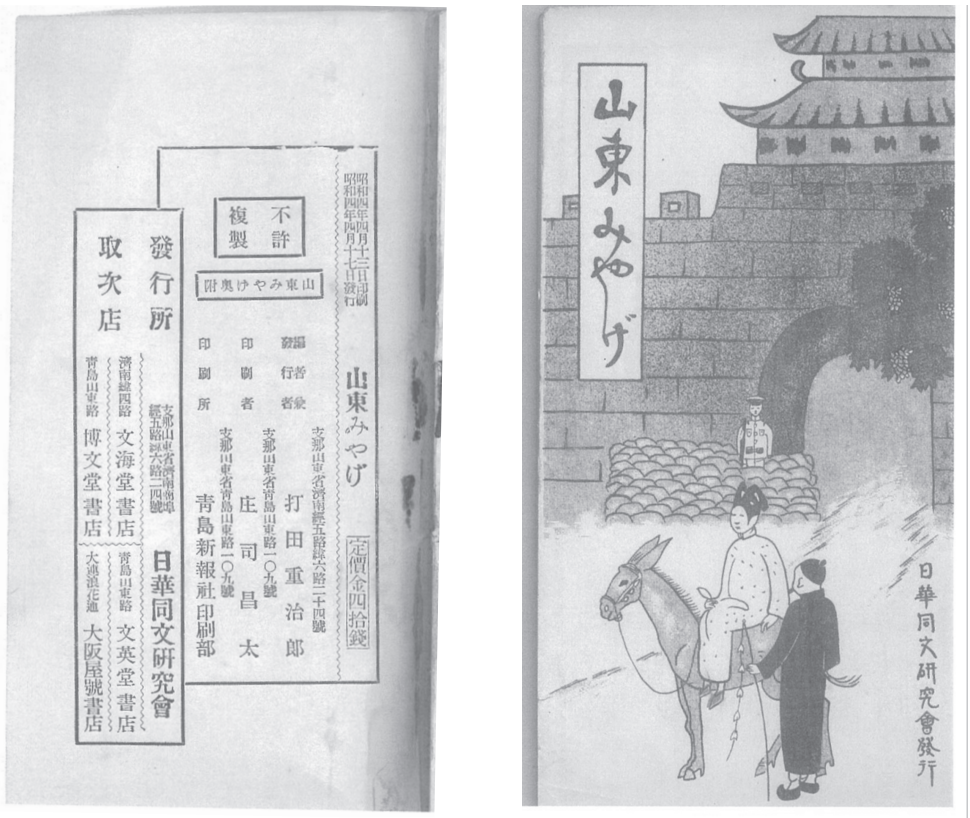
前述したように、CiNii、国立国会図書館サーチで、「打田重治郎」を検索すると、打田訳以外、『山東みやげ』という著書が見られる。3.1節で詳しく述べるが、『山東みやげ』から、打田重治郎は「打田葵園」という名前を使用したことが分かった。上記のデータベースを利用し、「打田葵園」で検索すると、『日華陸海軍兵語辭典』という著書が見られる（最終閲覧日、2022年8月10日）。

この二点の資料について、内田ほか（2017）を確認し、関西大学アジア・オープン・リサーチセンター、鱒澤文庫に所蔵されていることが分かった。関西大学研究所事務グループの職員のご協力を頂き、pdfファイルで表紙、序文、目次、奥付等を閲覧することができた。

以下、本節では、打田重治郎、打田訳以外の著書である『山東みやげ』、『日華陸海軍兵語辭典』を紹介し、また序文などから、打田重治郎の生い立ちを考察する。なお、本稿において、『山東みやげ』、『日華陸海軍兵語辭典』の画像の掲載は、関西大学研究所事務グループから許可を得ている。

3.1 『山東みやげ』について

『山東みやげ』は、当時、山東省に派遣される日本軍のために書いた本だと思われる。また、自序の署名には、「打田葵園」という名前が使用されていると分かった。『山東みやげ』の奥付、表紙の画像を以下に示す。



画像1　『山東みやげ』奥付、表紙

（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター鱒澤文庫所蔵）

『山東みやげ』は横9cm×縦17.5cm、63頁である[1]。奥付によると、『山東みやげ』は昭和四年（1929年）四月十七日の発行である。編者は打田重治郎、出版社は日華同文研究会[2]、取次店は文海堂書

[1] 内田ほか（2017）のp.398による。

[2] 国立国会図書館サーチで「日華同文研究会」を調べると（最終閲覧日、2022年8月10日）、日華同文研究会は『山東みやげ』以外に、『山東省交通経済詳密地図』（1930年）を出版している。本論文の3.2節において、打田重治郎『日華陸海軍兵語辭典』の署名を確認したところ、「中華民国山東省濟南　日華同文研究會にて」と書いてある。したがって、日華同文研究会は山東省済南にある出版社で、主に山東省についての書籍を出版しているではないかと考えられる。打田重治郎は日華同文研究会と深い関わりがあると窺える。

店（済南）、博文堂書店（青島）、文英堂書店（青島）[3]、大阪屋号書店[4]（大連）である。

目次は次のとおりである。

第一編　山東とはどんな處

第一章　山東省概説

第二章　青島沿革

第一節　青島よいとこ

第二節　何うしてそんなに立派になつた？

第三節　現今の有様と將來

第三章　膠濟鐵路沿線概説（汽車からの眺め）

第一節　大港から青州まで

第二節　青州から濟南まで

第四章　濟南沿革

第一節　水の都　埃の名物

第二節　城内と商埠地

第三節　交通

第四節　風俗習慣　名勝　戰跡

第五章　津浦鐵路沿線概説　帝國政府の出兵聲明書

---

[3]　文海堂書店、文英堂書店、博文堂書店について、『小賣店名簿』（日本出版配給株式会社）（戸家（2015）に収録される復刻版、戸家（2015）のp.163）における記述は以下のとおりである。
「同（濟南市）商埠四路 文海堂 宮嶋宏行　⊗中」、「同（青島市山東路）八二號　文英堂　松山武一　⊗」、「青島市山東路一五八號　博文堂　保坂九二八　⊗中」（「驛名、住所、稱號、代表者、備考」の順で記述される。括弧内は、筆者が前文を確認して「同」で示すものを入れた。資料の「小賣店名簿取扱種目符合表」によると、備考欄の「⊗中」は「書籍雜誌　中敎　扱ヒ店」、「⊗」は「書籍雜誌　扱ヒ店」である。）

また、文英堂（旅順）、博文堂（釜山）について日比（2013）が言及する。『山東みやげ』の取次店の文英堂、博文堂は青島にあるため、文英堂（旅順）、博文堂（釜山）との関係は不明である。しかし、支店である可能性もあるので、記述を以下のとおり引用する。
文英堂について、「東亜公司系の外に二系統のチェーン店が確認できる。一つは大阪屋号系、もう一つは上山文英堂系である。 後者については、…中略…旅順の文英堂は山口市で書店を営んでいた山縣富次郎が一九一〇年に渡満して創業したものだが、もとは下関市の上山松蔵が経営していた旅順文英堂支店を継承したのもだとある。この上山松蔵が文英堂チェーンのオーナーであり、拠点は下関だったことがわかる」と述べている。
博文堂について、「戦前期の朝鮮日本人社会の三大書店は、この大阪屋号の京城支店と、日韓書房（京城）、博文堂（釜山）であり、組合も一九二九年以降は組合長に内藤、副組合長に徳力新太郎（日韓書房）、吉田市次郎（博文堂）の二名の体制となっていた」述べている。

[4]　大阪屋号書店について、湯原（2019）では、「「大阪屋号書店」とは、かつて日本統治下の大連に本店を構え、満洲や朝鮮各地に支店を置き、日本の「外地」と呼ばれた地域に一大チェーン店を形成した日本の書籍、雑誌を取り扱う小売書店である」と述べている。

第二編　濟南事変概説
第一章　抑も事変の始まりは
第一節　南軍と北軍
第二節　北軍の敗退
第三節　南軍の殘虐
第二章　我軍の出動
第一節　出兵直前の狀況
第二節　天津部隊派遣概況
第三節　熊本第六師団應急出動概況
第三章　我軍第二次の出兵
第一節　名古屋第三師團の動員
第二節　周陽集の戰鬪
第三節　第三師團警備狀態

目次を見ると、山東省の事情を説明する第一編と「済南事件」の概説である第二編に分かれている。第一編では、山東省全体の概説、青島、済南の主要都市の記述、鉄道沿線の事情などが記述され、第二編では、「済南事件」の発端、出兵の状況が記述されていると考えられる。

当時「山東派遣第三師団参謀長」である谷寿夫[5]が序文を寄せている。内容は次のとおりである（番号、下線、句読点は筆者による）。

> 孔子が生まれて、天下を徳化し、阿倍仲麿が留學して、偉績を遺した。日本と最關係に深い由緒ある山東の地に、昭和の三年五月三日斯なる不祥事が起らうとは。それこそ孔子も之を豫斷しなかつたであらう。日支兩國々交の爲め返す／＼も遺憾に堪えない次第であるが、出來た事は致し方がないとして、此上は善後事宜が兩國の爲め、最も吃緊である。頃日、打田重治郎氏をして、①『山東みやげ』として沿線事情の概要と、今回派兵の狀態とを簡記すべく命じた。氏は支那に游ぶこと三十年、②頭腦明晰特に語學の才能に秀づ、其観察や正鵠、其記述や簡にして要を得たるものに似たり。③最近の山東を視るに於て、将た我軍整備の跡を談るに於て、蓋し簡明的確と謂ふも過言でない。尚ほ本書の編纂に就ては、平手經理部長の努力を感謝せざ

[5] 谷寿夫について、データベースJapanKnowledgeにおける『日本人名大辞典』（講談社）の記述は次のとおりである。
明治-昭和時代前期の軍人。明治15年12月23日生まれ。駐英武官、母校陸軍大学校の教官、参謀本部課長などを歴任。昭和9年陸軍中将。12年第六師団長として中国の南京攻略戦を指揮。昭和22年4月26日南京大虐殺の責任をとわれ、南京で刑死。66歳。岡山県出身。著作に「機密日露戦史」。

るを得ない。一言を巻首に題し、敢て之を江湖に薦むと云爾。

昭和四年三月三十一日

山東派遣第三師團參謀長　谷　壽夫

下線部①より、打田重治郎に「沿線事情」と「派兵の状態」を記述するように命じたという。また、下線部②、③より、打田重治郎について、語学の才能が優秀で、記述に適任であると評価している。

打田重治郎の自序は次のとおりである（番号、下線、句読点は筆者による）。

不得要領のやうで要領を得、要領を得て居るやうで不得要領な中華民國支那は、古來他國人のいとも不可解とする。所で、支那の各所に今まで随分多く不祥事は發生したが、支那人は何時まで經（原文ママ）たバ、目醒めるのかしら。支那上流の人々は馬鹿に開けて、智徳勝れ、富の程度も中々侮るべからざる。否寧恐ろしい程立派であるが、大部分の下層社会に至つては、又憎らしい程無知蒙昧である。①人も知る濟南事件の發生は實に由々しき不祥事であつた。我が帝國は曩に山東在住民の保護を目的に、先づ熊本六千の軍隊を應急出動せしめ、續て名古屋二萬の狙狙に對して、動員令を下された。②各部隊は勇みに勇んで、任地に駐せ、瘴熱劇寒何のその、剰へ大陸的の氣候激變に、士民の言葉は、サツパリ判らなかつたが、萬難を排して到る處に忍んだ苦みと、建てた勳は萬古に朽ちない功績と云はなければならぬ。時は何時、處は何處、して其國柄や、いくさ人の建てた功績の數は、此の小冊子の能く盡す所でない。今は只思ひ出の餘りに不幸。③此の事變に尊き犠牲となつた戰友の遺族や、勳を建てゝ目出度歸還する出動士卒の親たちに、ほんの參考として、かい摘んで最も手短かに物したのが本書である。若し夫れ詳細な記事や複雑な案内は、お自他にその物ありと譲つて置く。

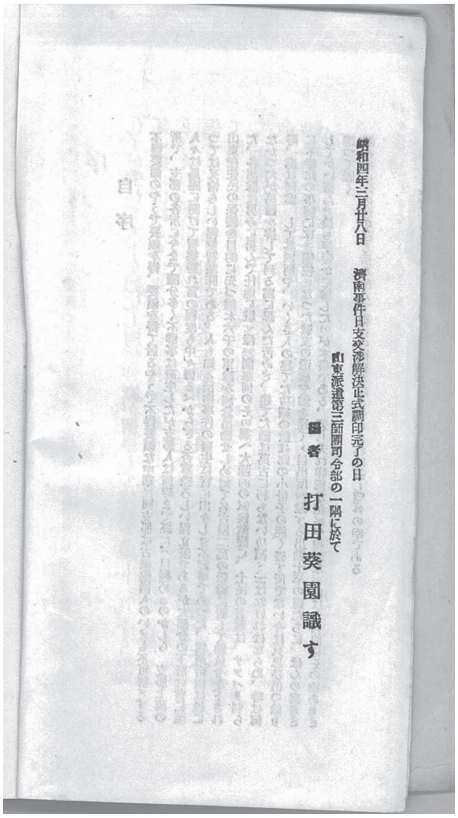
讀者幸に此の意の在る所を酌んで、編者の微衷を諒とせらるれば、蓋し望外の幸である。

昭和四年三月廿八日　濟南事件日支交渉解決正式調印完了の日

山東派遣第三師團司令部の一隅に於て

編者　打田葵園識す

この自序によると、下線部①より、「済南事件」が起こり、日本は出兵したこと、下線部②より、日本軍は当地の気候、言葉などの困難に遭ったとわかる。また、下線部③より、『山東みやげ』は山東省に派遣される日本軍のために書いたものであることが窺える。末尾の日時と署名から、昭和4年（1929年）第三師団司令部で書いたこと、編者名に「打田葵園」を使っていることが分かる。自序の署名部分の画像を以下に示す。


昭和四年三月廿八日　濟南郊外日支交涉懸案正式調印完了の日
山東派遣第三師團司令部の一隅に於て
編者　打田葵園識す

画像2　『山東みやげ』「自序」の署名部分
（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター鱒澤文庫所蔵）

巻末に、「『山東みやげ』の奥に書して」という一節があり、内容は次のとおりである（番号、下線、句読点は筆者による）。

> 此の冊子には①第三編に『其後の山東地方行政』として、膠澳商埠及濟南の自治と支那軍の配置、第四編に『今後の山東』として支那の排外、山東の豊庫と将来の發展を物し、終りに附録として、山東旅行の案内を詳しく記載する考であつたところが、日支の交渉懸案が解決されて、②三月二十八日午前九時三十分南京で正式調印が濟んだと云ふ電報が編者の耳に達したので、撤兵も眞近に行はるゝことゝ思ふので、遺憾ながら筆を爰に擱くことゝしたのである。
>
> 編者識す

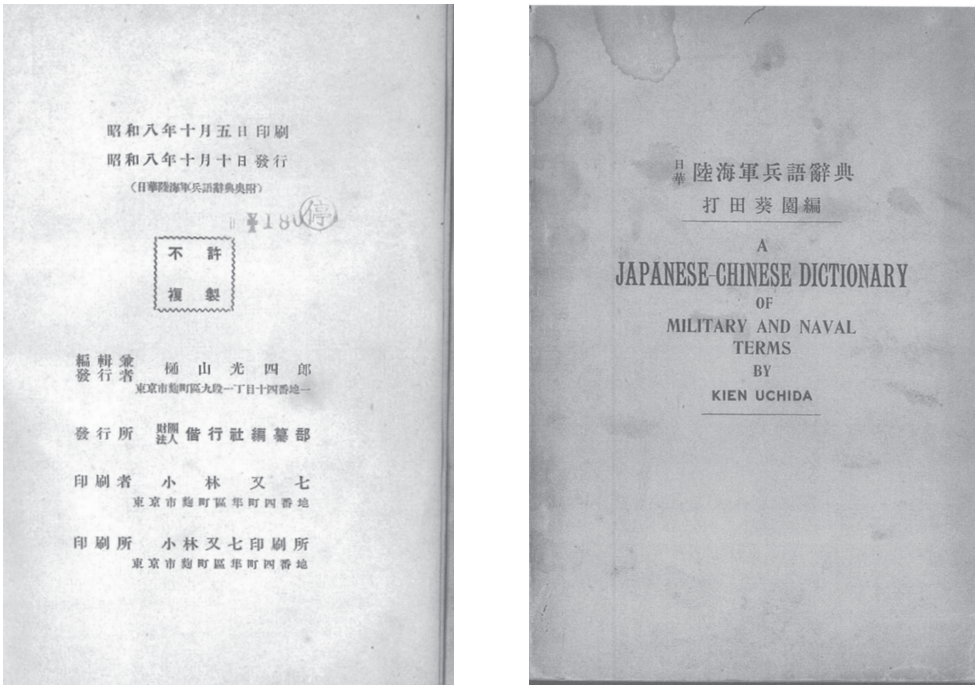
下線部①より、打田重治郎は、山東の行政、中国軍の配置、将来の発展などに関する内容を記述しようとしたが、下線部②より、「正式調印」が終わり、これらの内容についての執筆をとりやめ

たことが分かる。このことからも、『山東みやげ』は山東へ進出する日本軍のために書かれたものであると考えられる。

3.2 『日華陸海軍兵語辭典』について

「打田葵園」という名前で出版したものとしては、『日華陸海軍兵語辭典』がある。自序の署名には「南勢　葵園」とあり、「南勢」は出身地を示しているのではないかと思われる。以下、『日華陸海軍兵語辭典』について説明する。

『日華陸海軍兵語辭典』の奥付、表紙は、以下の画像3のとおりである。



画像3　『日華陸海軍兵語辭典』奥付、表紙
（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター鱒澤文庫所蔵）

『日華陸海軍兵語辭典』は横12.7㎝×縦18.7㎝である[6]。「支那語研鑽の基礎」（33頁）、辞書の部分（252頁）からなっている。「支那語研鑽の基礎」では主に中国語の発音方法が記述されている。辞書部分の配列は、「abaku【發ク】洩漏hsieh^{4}lou^{4}」で始まり、「zutsū【頭痛】頭疼t'ou^{2}t'êng^{2} 腦袋疼nao^{3}tai^{4}t'êng^{2} 頭風t'ou^{2}fêng^{1}」で終わっている。日本語の読みのアルファベット順に単語が配列され、続けて、対応する中国語の単語および発音が示されている。

[6] 内田ほか（2017）のp.169による。

奥付によると、『日華陸海軍兵語辭典』は昭和八年（1933年）十月十日発行である。編輯兼発行者は樋山光四郎[7] で、発行所は偕行社[8] である。

打田重治郎による自序は次のとおりである（番号、下線、句読点は筆者による）。

予在支三十年此間、①滿鐵補習學校及中等校に語學の敎鞭を執ること前後七年、②北清、日露の戰役に西比利亞、山東の派兵に加はり、通譯たること二回。③曾て張宗昌[9] 將軍が山東に督辦たりし時、義威軍幼年模範團に軍事飜譯官たること年あり。當時予は特に④兵語日支對譯の事に盡瘁し、諸種の典範、兵書等を參酌し、其穩健妥當の譯語を得るに力め、愼重考攷。更に先覺諸士に質し、隨て得れば隨て録し、蒐集類纂積んで、冊を爲すに至れり。然も予の業務多事なる、之を梓に上すに遑あらず。此頃二、三友人來り訪ひ、偶此冊子を瞥見し、予に告げて曰く、速に此好個の良書を上梓することは、日支兩國の兵家に取り極めて喫緊の事に屬す。深く筐底に祕す、又何をか爲さんやと。予は此好誼に感激し、更に改竄數回、刻苦精勵、終に此書を成すに至れり。

更に予は玆に特記すべきものあり、本書を編するに當り、濟南駐在武官陸軍歩兵中佐、櫻井正信[10] 殿は、軍務御繁用にも拘らず、一々筆を執つて、兵用語の修正に周到なる校正を施され、

---

[7] 国立国会図書館サーチで「樋山光四郎」を調べると（最終閲覧日、2022年8月10日）、樋山光四郎の書籍が19件表示され、すべて偕行社によって1930年前後出版されたものである。たとえば、『初陣の戦場心理』（1936）、『満蒙問題研究資料』（1931）などがある。本のタイトルをみると、戦争、植民地についてのものが多い。

[8] 偕行社について、データベースJapanKnowledgeにおける『国史大辞典』の記述は次のとおりである。
旧日本陸軍将校の親睦共済団体。明治十年（一八七七）二月十五日、東伏見宮嘉彰親王を総裁に、十六名の陸軍将官が世話人となって創立された。…中略…事業規模も広汎で、東京九段の本館のほか、全国各地に集会所を持ち、冠婚葬祭、宿泊、軍装品の販売、図書の刊行などにわたり、直営の小学校もあった。…後略…

[9] 張宗昌について、『近代中国人名辞典　修訂版』（霞山会）p.843における記述は以下のとおりである。
（1881年2月13日～1932年9月3日）字・効坤、綽名・狗肉将軍、長腿将軍。山東省液県祝家荘生まれ。軍人。…中略…26年はじめ、…中略…反国民軍の合作条件を結び、3月には国民軍を追って奉軍と直魯連軍は天津に、4月には北京に入った。張は北京政府より義威上将軍を授けられた。…後略…

[10] 桜井正信について、『日本陸海軍人名辞典』（芙蓉書房）p.225における記述は次のとおりである（本の「凡例」によると、「歩」は「歩兵」の略記。＜＞で示しているのは最終階級及び任官年月日。その次は主な軍歴。最後「」で示しているのは卒業期。「陸」は「陸軍士官学校」）。
桜井　正信（歩　富山）＜昭和11.8.1陸軍少将＞昭10.8.1近衛師団司令部附（法大）「陸・19」

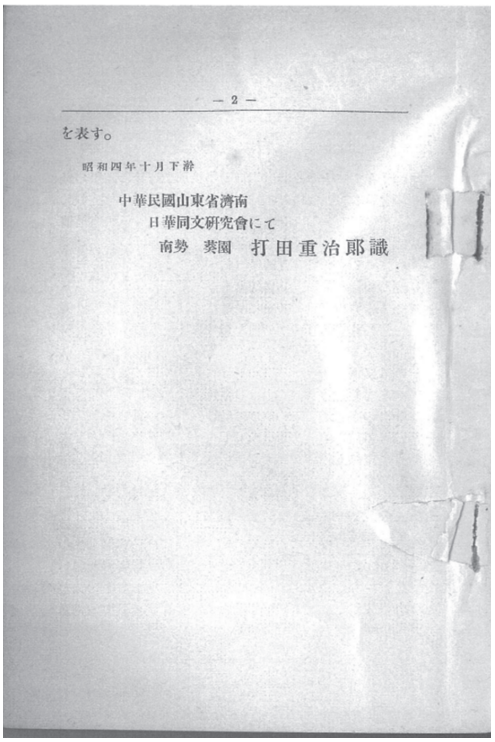
又在濟南總領事、西田耕一[11] 殿は、公務御多端中、懇切なる御指導と華語の修正とに、多大の好資料を與へられたり、本書の光彩之によつて添ふる所あるや云ふを待たず、編者深く感佩する所なり、茲に謹で滿腔の謝意を表す。

昭和四年十月下澣
中華民国山東省濟南
日華同文研究會にて
南勢　葵園　打田重治郎識

自序によると、下線部①より、打田重治郎は、「満鉄補習学校、中等校」で語学の教師七年を務めた。恐らく中国語を教えていたと推測される。このほか、下線部②、③より、従軍通訳、軍事翻訳官も経験したと分かる。下線部④より、通訳の経験を活かし、兵書などを参照しながら、『日華陸海軍兵語辭典』を書いたことが窺える。

自序の署名部分には、「南勢　葵園　打田重治郎識」と書かれている。ここの「南勢」は打田重治郎の出身地を指しているのではないかと思われる。自序の署名部分を次の画像4に示す。

[11] 西山耕一について、『大衆人事録　第14版　外地・満支・海外篇』（帝国秘密探偵社）における記述（頁数は支那p.103）は次のとおりである。（『大衆人事録』の記述において「耕」は異体字、「西山畊一」と表記）
従四勲四　山東省公署顧問　陸軍省囑託濟南特別市小緯二大字一一一號　電一九【閲歴】京都府作次郎長男明治十八年一月八日同府愛宕郡大宮村に生る同卅七年東亜同文書院卒業北京公使館官費生として北京に赴き爾來天津總領事館北京公使館奉天上海各總領事館等歴職英國出張公使館二等書記官北京公使館在勤領事總領事済南在勤冀察政府政務委員會顧問を經て現職就任　宗教佛教　趣味讀書　【家庭】妻セツ子（明二〇）小村良平女三輪田高女卒　長男昭夫（昭二）　三女華子（大七）同校卒　四女和子（大八）同校卒　五女李子（大一〇）京都府立一高女卒　長女總子（明四四）同志社高女京都一高女研究科各卒は津吉平吾に二女典子（大五）同志社高女卒は植竹秀三郎に各嫁す。


— 2 —

を表す。

昭和四年十月下澣

中華民國山東省濟南
日華同文研究會にて
南勢　葵園　打田重治郎識

画像4　『日華陸海軍兵語辭典』「自序」の署名部分
（関西大学アジア・オープン・リサーチセンター鱒澤文庫所蔵）

「南勢」について、データベースJapanKnowledgeに収録されている『日本大百科全書』（小学館）を調べてみると、以下のように記述されている（下線は筆者による）。

南勢
なんせい
三重県中南部、度会郡（わたらいぐん）にあった旧町名（南勢町（ちょう））。現在は南伊勢（いせ）町の東半分を占める地域。熊野灘（なだ）に面する。旧南勢町は、1955年（昭和30）五ヶ所町と穂原（ほはら）、宿田曽（しゅくたそ）、南海（みなみ）神原（かんばら）（大部分）の五ヶ所湾を巡る1町4村が合併して成立。南勢の名は伊勢国の南にあることによる。2005年（平成17）南島（なんとう）町と合併して南伊勢町となる。国道260号が通じ、JR参宮線伊勢市駅などからバスの便がある。近世は紀伊藩田丸領。五ヶ所湾は典型的なリアス式沈水地形で、沿岸には浦村とよばれる純漁村が点在し、周辺の丘陵は五ヶ所ミカンの産地。宿田曽浦、南海などは遠洋漁業の基地としても栄えた。湾内には養殖筏（いかだ）が浮かび、昭和30年代までは真珠養殖が全盛を極め、近年はハマチ・タイ養殖なども盛ん。全地域が伊勢志摩国立公園域で、

別荘地やマリーナの開発が進んでいる。水産研究･教育機構増養殖研究所､暖地性シダ群落（国天然記念物）､南北朝時代この地を治めた愛洲（あいす）氏の五ヶ所城跡（県史跡）や資料館「愛洲の館」などがある。

『日本大百科全書』の記述によると、南勢という地名は、伊勢国の南にあることに由来している。現在、三重県の度会郡にあたる場所である。したがって、打田重治郎の出身地は、現在の三重県の中南部に位置する度会郡であると考えられる。

3.3　打田重治郎の経歴についてのまとめ

以上の調査から、打田訳、『山東みやげ』、『日華陸海軍兵語辭典』の序文などにより、打田重治郎の経歴は次のようにまとめることができる。

・南勢、現在の三重県出身。「打田葵園」という名前を使用。
・明治39年（1906年）から中国の東北地方に滞在。陸軍通訳官。
・大正9年（1920年）から山東省に転任。
・大正13年（1924年）『急就篇を基礎とせる支那語獨習』を出版。当時は済南居留民会書記長。
・昭和4年（1929年）『山東みやげ』を出版。
・昭和10年（1935年）『日華陸海軍兵語辭典』を出版。
・このほか、時期不明だが、「満鉄補習学校、中等校」において中国語教師、計七年間。

4.　打田訳における二重可能表現形式について

打田重治郎が三重県出身であるため、打田訳における表現は三重方言の影響を受ける可能性もあると考えられる。打田訳の可能表現には､「～エル」に助動詞（ラ）レルが付く二重可能形式の「動詞連用形＋エラレル」が見られる。この節では、この形式が三重方言と関係しているかについて考察する。

4.1　打田訳と杉本訳・大橋訳の共通点及び相違点

「動詞連用形＋エラレル」は、杉本訳･大橋訳においても見られる。しかし、杉本訳･大橋訳では､「動詞連用形＋エラレル」は、中国語文からの訳文にしか出現せず、これらについては中国語原文の可能表現形式の影響を受けていると考えられる。たとえば、以下の（1）[12] では、中国語文「學得

[12]　用例（1）の括弧内の文は、訳本では、割注として出現する。見やすくするため、ここでは、二行になっている割注を括弧内に入れて示す。

出來學不出來」に対する訳文は、杉本訳が「修得シ得ラル」（注釈）、大橋訳が「學修し得られる」（本文）、打田訳が「學修し得られます」（本文）、「修得し得らるゝ」（注釈）である。訳者三人とも、「動詞連用形＋エラレル」を使用し、訳している。

（1）你聽他說的話可以學得出來學不出來　他一定學得成　問答之下23
　　你ハ彼ガ咄ス言葉ヲ聽イテ修得ガ出來マスカ出來マセンカ（修得シ得ラルト思フカ）
　　彼ハ必ズ成業（學ヒ遂ゲ得ラルル）シマス　杉本訳
　　君がお聽になつて彼の咄す話は學修し得られませうか　彼は屹度學び遂げられます　大橋訳
　　君は彼が話す言を聽いて學修し得られますか　彼は必ず習ひ遂げられます
　　（學的出來學不出來「修得し得らるゝか否か」の意「習ひ續けらるゝか」なり）　打田訳

一方、打田訳においては、「緒言」、「例言」の部分に「動詞連用形＋エラレル」が見られる。「緒言」、「例言」は、訳文ではないので中国語原文の影響はなく、打田重治郎自身が書いた文章である。たとえば、以下の（2）である。打田訳において、中国語原文と関係なく、「動詞連用形＋エラレル」が使用されている点は、杉本訳・大橋訳との大きな相違点である。

（2）發音が不完全であれば如何に四聲を正した處で十分に意思を表はし得られない
　　緒言　十二

4.2　打田訳と三重県方言について

前節に述べたように、打田訳では、中国語原文の影響を受けない、打田自身の文章に「～エラレル」という二重可能表現形式が存在することが確認できた。杉本訳・大橋訳には見られないことから、この点は打田訳の重要な特徴的であると考えられる。以下、「～エラレル」形式の使用は打田重治郎が三重県の出身であることと関係があるかについて検討する。

近畿方言に関する先行研究には、「～エル」の二重可能表現形式「～エレル」に言及しているものがある。たとえば、楳垣（1962）では、以下のように述べている（下線は筆者による）。

> 南牟婁・新宮市には読ミエレル（ヨメレル）・見エレルという可能表現がある。…中略…熊野地方では、前にも述べたように、ヨミエル・ヨミエレル・ミエレルのようにエル・エレルを使っているのは珍しい。ところが、このあたりでは、五段にもエレルがつく傾向が強く、可能形もヨメレル・カケレルのようになる。イケレル・イケレヘンは紀州の橋本市周辺でも使っているという。

楳垣（1962）の記述によると、「南牟婁・新宮市」、「熊野地方」のような和歌山県南部、三重県南部の地域においては、「～エレル」という可能表現が存在する[13]。また、三重県方言についての研究である楳垣（1962a）では、以下のように述べている（下線は筆者による）。

> エレル・エルは、動詞および使役助動詞へは連用形へ続き、助動詞・助詞の接続は、前項可能の場合に準じる。カ変・サ変はキエ（レ）ル（着（原文ママ）られる）・シエ（レ）ル（為られる）である。これはかなり珍しい可能助動詞で、静岡県の大井川上流に「える」があったように記憶するほか、他ではあまり聞いたこともない。ここでは「読メレル」と使うのだから、「エル」が「ラレル」「ヤレル」の影響で「エレル」となったものらしいが、ひょっとすると、「ヤレル」が「エレル」となり更に「エル」となったのかとも疑いたくなる。精査の必要があろう。

形式上、打田訳の「～エラレル」と違い、楳垣（1962）、楳垣（1962a）は「～エレル」が三重県に存在すると述べている。しかし、「～エラレル」も「～エレル」も「～エル」をさらに可能の助動詞「～レル」／「～ラレル」をつけた形式であるため、両者は「～エル」の二重可能表現形式である点において変わりがない。つまり、打田訳における「～エラレル」は三重県方言の影響によるものである可能性が考えられる。

5. まとめ

以上、本稿では、『急就篇を基礎とせる支那語獨習』の著者である打田重治郎の経歴について考察した。

まず、打田重治郎の著書、『山東みやげ』における「自序」の署名を確認し、打田重治郎は出版物の編者名には「打田葵園」という名前を使用したことが分かった。

次に、「打田葵園」の名前で出版した『日華陸海軍兵語辭典』の「自序」の署名部分に「南勢葵園」とあり、この「南勢」は打田の出身地を示していると思われる。つまり、打田重治郎の出身地は三重県であると考えられる。

最後に、打田訳における二重可能表現形式「～エラレル」と三重県方言の関係を検討した。先行研究によると、三重県方言では、「～エレル」が存在する。「～エレル」と「～エラレル」は形式上、相違するが、両形式は「～エル」をさらに助動詞をつけた二重可能表現形式である点においては変

---

[13] 『方言文法全国地図』第4集―表現法篇1―を確認した。「読むことができない「能力可能」」の調査において、三重県熊野市金山町（調査地点番号7504.72）では「ヨメレン」の使用が確認できる。また、三重県と隣接する和歌山県新宮市新宮（調査地点番号7513.69）では、「読むことができない〈状況可能〉」を「ヨメレン」、「着ることができない〈状況可能〉」を「キエレン」と言う使用状況が確認できる。
なお、場所の確認は『方言文法全国地図解説4』、「調査地点番号地図」を利用した。

わりがない。したがって、打田訳において、「～エラレル」の使用は三重県方言（二重可能表現形式）の影響を受けている可能性があると考えられる。

今後、打田訳の日本語表現を考察する際、打田重治郎が三重県出身であることを考慮に入れるべきだと思われる。

参考文献

稲岡勝（2013）『出版文化人物事典』日外アソシエーツ

内田慶市ほか（2017）『関西大学東西学術研究所鱒澤文庫目録（初稿）』関西大学東西学術研究所（関西大学学術リポジトリ）

楳垣実（1962）「近畿方言総説」『近畿方言の総合的研究』三省堂

楳垣実（1962a）「三重県方言」『近畿方言の総合的研究』三省堂

近代中国人名辞典修訂版編集委員会（2018）『近代中国人名辞典　修訂版』霞山会

後藤金寿（1935）『全国書籍商総覧』新聞之新聞社（高野義夫（1988）『出版文化人名辞典　第4巻』（日本図書センター）に収録される復刻版）

国立国語研究所（1999）『方言文法全国地図第4集―表現法編1―』国立国語研究所（pdf版）

国立国語研究所（1999）『方言文法全国地図解説4』国立国語研究所（pdf版）

常衛邦（2021）「明治・大正期の中国語教科書における可能表現―大橋末彦『官話急就篇詳譯』について―」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』50

常衛邦（2021a）「明治・大正期の中国語教科書『官話急就篇』訳本の可能表現」『岡山大学大学院社会文化科学研究科紀要』52

園田博文（2017）「杉本訳『官話急就篇総訳』（大正5年刊）における質問表現―大橋訳・打田訳・宮島訳との比較を通して―」『山形大学紀要（人文科学）』18－4

園田博文（2017a）「『官話急就篇』『急就篇』訳述書4種の日本語―近代日本語資料としての性質と活用法について―」『山形大学紀要（教育科学）』16－4

園田博文（2020）『日清戦争以前の日本語・中国語会話集』武蔵野書院

帝国秘密探偵社（1943）『大衆人事録　第14版　外地・満支・海外篇』帝国秘密探偵社（日本図書センター（1987）『昭和人名辞典　第4巻』（日本図書センター）に収録される復刻版）

竹中憲一（2012）『人名辞典「満州」に渡った一万人』皓星社

日本出版配給株式會社業務部取引課（海外）（発行年不明）『小賣店名簿 朝鮮、臺灣、關東州、滿州、蒙彊、支那、南洋、委任統治、南方圏、秦國、佛印之部（昭和17年12月現在）』（戸家誠（2015）『出版流通メディア資料集成（四）内地外地書店名鑑 ―明治大正昭和戦時期の本屋ダイレクトリー【第

三巻】』（金沢文圃閣）に収録される復刻版）
丹羽一彌（2000）『三重県のことば』（日本のことばシリーズ24）明治書院
芳賀登ほか（1999）『日本人物情報大系　満州篇』皓星社
日比嘉高（2013）「外地書店とリテラシーのゆくえ―第二次大戦前の組合史・書店史から考える―」『日本文学』62－1
福川秀樹（1999）『日本陸海軍人名辞典』芙蓉書房
湯原健一（2019）「大阪屋号書店小史」『国研紀要』153
六角恒廣（1992）『中国語教本類集成 第二集第一巻』不二出版